

IgG4関連疾患の診断基準並びに診療指針の確立を目指す研究
(分担) 研究報告書

自己免疫性膵炎の全国調査

研究分担者 下瀬川徹 東北大学 名誉教授
正宗 淳 東北大学大学院 医学系研究科 消化器病態学分野 教授

研究要旨

前回の自己免疫性膵炎全国調査から5年が経過し、現状の把握が必要である。本研究では2016年受療患者を対象とした全国調査を実施した。

A. 研究目的

自己免疫性膵炎を含むIgG4関連疾患は疾患概念の啓発・普及により新たに診断される症例が増加している。自己免疫性膵炎の実態調査としてこれまでに3回の全国調査が行われており、前回調査から5年が経過した。本研究の目的は第4回目の自己免疫性膵炎全国調査により実態を明らかにすることである。

B. 研究方法

平成29年6月に全国の2502診療科（内科（消化器内科を含む）と外科（消化器外科を含む）を標榜する診療科）へ一次調査票を発送し、集計を行った。平成30年6月に一次調査へ回答のあった施設へオンライン入力での二次調査を依頼し、集計を行った。

（倫理面への配慮）

研究分担者施設倫理委員会にて承認済み
(2019-1-490)

C. 研究結果

平成30年3月末までに854診療科より一次調査への回答が得られた（回答率：34.1%）。平成28年の自己免疫性膵炎年間受療患者数は13,436人（95%信頼区間：10,952-15,921人）（うち新規 3,984人）（95%信頼区間：3,218-4,755人）であり、前回調査の約2.3倍であった。平成31年3月末までに得られた二次調査結果の集計により、1,474例の臨床情報が得られた。男女比は2.94であり、男性では70歳代が、女性では60歳代が最多であった。血清IgG4の増加は84.5%の患者で見られた。

多くの症例では膵腫大と主膵管の狭細像を認めた。組織採取が64.0%の患者で行われており、EUS-FNAが最多の採取手技（85.5%）であった。好中球浸潤を伴わないリンパ形質細胞浸潤は60.4%に、IgG4陽性形質細胞（高倍率視野当たり>10個）は33.9%に、花筈状線維化は23.4%に、閉塞性静脈炎は11.9%に認めた。膵外病変は60.0%の症例で合併しており、硬化性胆管炎が最多であった。ステロイド治療が84.4%の患者で行われており、ほぼ全ての症例（98.6%）で良好な反応が得られていた。維持療法は85.0%の患者で実施されていた。再燃は23.4%の患者で発生していた。

E. 結論

自己免疫性膵炎全国調査を実施し、集計結果を原著論文として発表した。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Masamune A, Kikuta K, Hamada S, Tsuji I, Takeyama Y, Shimosegawa T, Okazaki K; Col laborators.

Nationwide epidemiological survey of autoimmune pancreatitis in Japan in 2016.

J Gastroenterol. 2019

[Epub ahead of print]

2. 学会発表

該当なし